

131 能舞台 (2022年10月6日)

以前に、エクサンプロバンスのサン=ミトル公園に日本庭園があることをご紹介しました (*)。実は、この日本庭園の隣には本格的な能舞台があります。

能とは、日本で 600 年以上受け継がれてきた日本で最も古い舞台芸術です。能楽師が、独特の装束と仮面を身に着け、謡と囃子に合わせて舞う仮面劇です (仮面を着用せずに舞だけを披露することもあります)。2008 (平成 20) 年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。

この能舞台は、1992 年に熊本市在住の喜多流の能楽師・狩野琇鵬 (しゅうほう) 氏 (フランス国内での呼称は狩野丹秀) (1937-2016) が、エクサンプロバンス市に寄贈したものです。能公演を始めとした様々な文化交流を経て、熊本市とエクサンプロバンス市は、2013 年に「交流都市」協定を作成しました。

この能舞台は、日本国外では唯一となる総檜のものです。日本では、檜は最高品質の建材と考えられており、檜の舞台で演じることは名誉なことと考えられてきました。そこから、「檜舞台に立つ」というと、日常生活においても名誉な場所に出ることを意味するようになりました。



今年 9 月に、この能舞台で 7 年ぶりに日本から喜多流の能楽団が来仏して、能公演が行われました。エクサンプロバンスにある能舞台は、普段は扉が閉まっていますが、公演を行うときには扉を開けて屋外の劇場となります。能は専用の舞台で演じられ、その形は決まっています。メインステージである本舞台の後ろに鏡板と言われる板壁があり、必ず松の木が描かれています (写真右)。松の木には神が宿



っており、能は神に見守られながら演じられていると考えられています。鏡板の前には、楽器演奏者である囃子方が座ります。左奥は、橋掛かりと言い、登場人

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本



物の入退場の通路となるだけでなく、ここでも演技が行われます（写真左）。本舞台の右側には、地謡座と言って、謡を担当する地謡方が座る場所があります（上の写真の右側）。能は分業制で、演技をする人、謡を担当する人、楽器を演奏する人に分かれています。能は、それぞれのプロの業を結集して作り出される総合芸術です。今回の公演には、

狩野琇鵬氏の御子息である狩野了一さんと了一さんの御子息（琇鵬氏の孫）の祐一さんが出演しました。親から子へと代々にわたって業を受け継ぐことで、日本の伝統文化は守られてきました。

今回の公演に集まった多くの観客は、指先まで神経の行き届いた能楽師の美しい所作に引き込まれた様子でした。これまで触れたことのなかった伝統文化に触れて、新たな日本を発見したことでしょう。日本が開国したばかりの明治時代（1868-1912）に、ヨーロッパを視察した政府高官が、ヨーロッパではオペラ観劇で要人をもてなしていることを知り、日本でも外国の要人をもてなすために能が演じられるようになりました。

エクサンプロバンスの能舞台が、日本庭園と合わせて、フランスで日本文化を紹介する文化交流の場として、これからも活用されることを願って止みません。

* 113 日本庭園

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100348711.pdf>